

Studies on the Structure of Self or Meaning-space 1

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/627

自己乃至意味空間の構造に関する研究 I

…自我—自己—世界連続体モデルについて…

山岡 哲雄・金西美由紀*・佐藤 登*

Studies on the Structure of Self or Meaning-space I

…About the Model of Geo-Self-World-continuum…

Tetsuo YAMAOKA, Miyuki KANANISHI, and Noboru SATOH

本論は研究の試験的枠組みを示すものであり、今後のこの方向での可能性を探るための議論である。その厳密な理論的根拠に関する議論は、本論ではまだ取り扱っていない。その問題についてはいずれ稿を改めて論ずることにした。

1. 実験と理論との関係

精神現象は本来1つの意味乃至質的連続体としての立体的世界であり、その質的連続体における位置が様々な質の違いとして我々に認識されるものである。このように位置づけると、精神現象におけるそれぞれの質の領域乃至その境界は本来存在しない。それぞれの質の範囲乃至その境界は、これまでは習慣的に、従って人為的に、且つ比較的あいまいに定義されてきたのである。このためその範囲乃至境界線には、幅があり、その質について言及する人によって異なっていた。言い換えると、それぞれの質の定義と定義域とは任意であり、且つ任意であり得ると言うことである。このことについての十分な認識が必要である。このような認識に立つと、精神現象の様々な質とその構成について研究するには、これまで習慣的に用いられているあいまいな概念を用いて研究を開始し、これを実験や調査によって厳密な定義に修正して行くということは不可能であり、初めにその質と範囲の定義をしておかなくてはならないことが分かる。この視点に立つと定義される精神現象は相互に整合性が要請され、自ずと1つの体系

に纏められる。これが心理学上の説明、解釈、乃至仮説となり、実験・調査等の実践的研究はこの体系による説明の妥当性の検証の役割を担うものとなる。

本論はこの視点に立って、自我、自己、意識等の基本概念を再定義することにより精神現象を説明しようと試みた。

2. 意識の展開に関するモデル

意識は脳の中で生じているが、それはあたかも外部に展開しているかのように見える。そこでこの現象的な外界への広がり、どのように説明することができるかということから吟味することにしたい。

この問題を、考える前に、「意識がどうして生ずるようになったのか」と言うことについて、筆者らの仮説を述べておく必要がある。筆者らは先にも述べた通り、恐らく科学一般もそうであろうけれども、とりわけ精神科学は仮説であって、ある仮説を前提として、理論が組み立てられる、つまり「もしこのような前提条件が正しいと仮定した場合に、そこから論理的に次のような結果が引き出されるはずである」という仮定法で述べられる関係であると考えている。従って基本概念から順に定義してそれを組み立てていく必要があり、意識が何であるのか定義をしないまま、先に進めるわけにはいかない。

意識については、現在様々な性質が雑然とこの用語の中に詰め込まれていて、整理がついて

いないようであるが、意識は無意識も含めて精神現象全体の総称として捉えるべきものである。そしてそこには幾つかの基本的性質がある。この基本的性質には、覚醒度と内容、質と量、方向と、広がりと構造とがある。ここでは意識内容の定義から始めることにしたい。この他の性質については、議論の展開の中で逐次述べていくことにする。

定義：内容としての意識：ここでは意識の内容に関わる性質のことであるが、次のように定義する。

「意識体験（の内容）は識別の様式である」意識の内容は、例えば、我々の意識野に映じており、所謂「心像」として体験している心的映像としての意識をいう。周知の通り赤いという色は、自然界には存在しない。あるのはスペクトルの特定帯域がこれに対応しているケースが多い、ということだけである。それさえも状況によっては、我々に違った色の知覚を生じさせる。この赤いという意識体験の性質は、人間の心理過程においてのみ存在するものであって、これがあたかも外界に存在するかのように体験されるわけである。そこでこの色の体験がどのようにして可能になったのか、ということであるが、これがここで問題とする「識別の様式」として可能となったものだと、説明乃至仮定することになる。識別の様式というのは、この場合、「他のスペクトル帯域と区別するときの様式」ということであって、その様式は、どのような様式をとっても構わないのであるが、たまたま人間の場合、これを色の違いとして、例えば「赤い」という体験として識別したということになる。胃の痛みは、胃の活動が平常の活動とは異なって、言わば異常状態である場合に、「普段と違う」というその違いを識別する様式として、「痛み」の体験として意識されることになる。この赤さや痛みは自然界には存在しない。これを体験するのは、脳内の過程においてである。しかしそれはあたかも脳の外にあるかのごとくに、外にある物体の色として、或いは

脳以外の身体の中の「胃の痛み」として体験される。言い換えると、脳内過程が外界の対象に投影されたのであり、しかもこのときの脳内過程は、外界の量的連続を分割・構造化させ、これを符号化することによって特定の意識内容を創造的に識別している。

ここで例として挙げたものは、かなり高度な意識体験であるが、恐らくもっと原始的なレベルでは、単細胞生物が外敵を識別する様式として、光が遮られたとか、光が射してきた、と言ったものから始まったことだろうと想像される。我々の現在の意識体験は、大変複雑精緻であるが、このような原始的な状態から、徐々に識別様式が、分化し、発展してきた結果であると考えられる。ここでもう一つ考えておかなければならないことは、このように識別されるようになる前には、識別対象は、量的連続体としての性質以外にはなかったことになり、この識別様式による対象の複雑精緻化は、人間による対象の構造化・分節化の結果であること、またそれを可能にするためには、人間自体が、それを可能にするように、構造化・分節化していかねばならない、ということでもある。従って、環境の構造化・分節化と、人間自体の構造化・分節化とが平行して進行していった結果が、現在の意識体験を可能にしているということになる。このように考えると、我々の意識体験はこうした雑多な識別様式の集合体であるということになる。先にも述べたとおり、これを体験するのは、脳内の過程においてであるが、それはあたかも脳の外にあるかのごとくに、外にある物体の様々な色や形として、或いは脳以外の身体の中の胃の部分の痛みなどとして体験される。そしてこのように内部体験していることを、あたかも外にあるかのごとく体験するが、このとき体験しているものが我々の世界であり、この世界の構造は、我々がこしらえた様式の世界であるということでもある。このとき外部へ投影されて体験される意識は、外部世界に対する我々の最終的全体の解釈であり、様式化

であると考えられる。そこでこの意識体験を脳の活動過程として解釈すると、脳に到達した総ての関与刺激に基づく脳の全体的活動布置が、我々の「見ている外部世界の様相」として、全体として様式化されたのだということになる。これは言い換えると、我々の意識体験、これは後で定義する「自己」体験のことといえるのであるが、これは「脳の活動布置の全体的様式化そのもの」であるということであり、一般に考えられがちな、意識野は「一種のスクリーン」であり、そのスクリーンに写し出されている情景を見ている、或いは監視している自分という超越的な中枢部分を仮定する必要はなくなってくる。例えば、ある外界の情景を我々が見ているとすると、そこに見えている情景は、それはあたかも外の世界がそのままスクリーンに写し出されたかのように見えるが、それは外部世界に対する我々の全体的解釈であり、様式化であり、それが意識体験であり、自己である、ということになる。従来、ここで否定した超越的な中枢部分が、スクリーンに写し出された情景を見たり監視しているのだと考えたので、それに相当する中枢部分である自己乃至意識の座を脳の中に探さねばならなくなっていた。しかし自己乃至意識の座に相当する脳の中枢部は見いだされていない。これを上述のように解釈すれば、中枢部の存在を必要とせず、所謂「ホムンクルス」を仮定する必要は無くなり、ホムンクルスを仮定することによる無限後退の矛盾も起こらない。自己と意識とは外へ向かって外部世界の構造化・分節化を行っており、その識別の様式化として展開している。これが最終的に脳の全体的活動布置を引き起こすのだと考えることにより総てが上手く説明される。

3. 識別様式

意識内容は識別の様式である。人に限らずあらゆる存在するものに対して何らかの作用が加わった場合には、その作用によって反作用が生じ、そのことによって、それ以前とは異なった

状況が生ずる。本論では識別作用はそのことによって生じている状況を他の状況と区別する働きとして発達してきたものと考えられる。有機体の場合であれば、その識別作用はその有機体の存続を危うくする状況への警告として、その状況が他の状況とどのように異なるかを示すものとして働く。そこで本論ではこの「どのように異なるか」の示し方を「識別様式」という言葉で呼ぶことにしたい。

この識別様式は、違いの表示方法であり、一種の符号変換乃至記号化である。従ってそれ自体は自然界に存在せず、この識別過程で創造されるものである。つまり我々がある事態を他の事態と区別するときには、それをどのように区別しているかということについて符号表示しているのであり、我々が意識内容として体験しているものがその符号表示なのだ考える。身近な例を挙げると、先にも言及したように、我々の色の識別体験は「赤色」であり「青色」であるが、その原因となっているのは量的な光の波長の連続であり、そこには我々が体験している色の性質はない。我々の色の体験は、ある特定の帯域を他の帯域と区別する際になされた符号化が「赤い」又は「青い」という様式で識別しているのであると考えられる。このようにして、量的連続体としての外界が区分され、構造化され、構成され、解釈されて質的世界へと変換される。これらの結果は総て前述したように創造的に様式化されるのであり、その様式化は総て符号化乃至記号化される。これが我々の体験する意識内容であり我々が普通に意識している世界である。このことは後述するように我々の意識の世界は作られたものであり、真の実在ではなく、虚構の世界であることの説明ともなり得る。しかしこの変換はあらゆる場合に成り立つわけではない。作用が危機状況を引き起こし、これがある閾値を越えることが必要であり、この危機状況の増大による閾値が覚醒としての意識の性質を併せて生ぜしめているものと考えられる。

4. 客観化：言語化過程

意識体験或いは意識内容が外的世界の符号化の結果であると考え、言語が意識体験の記号化であること、言語的表出が意識を成立させることに寄与していることが分かる。言語は、社会的文化的様式が体系的定式化され、記号化されて、継時的記号列として表出されたものである。その意味では言語として表出される単位記号乃至単位記号列、つまり語、句、節、文といったものは、それぞれ我々が体験している意識内容の表象のもう一つの符号化であるといっ
て良いであろう。我々は外界の光のスペクトルの一部分を区分して、それを他のスペクトル部分とどのように異なるかを、例えば「赤い」という知覚的表象として識別する。しかしその段階では人は漠然と環境を認知し、その状況に浸っているに過ぎない。これを人がその言語文化圏における共通記号である音声的言語記号（例えば「アカイ」）に符号化するとき、その符号化によってその知覚状況が確認されるのであり、このことが状況の意識化をもたらすのであるといえる。つまり我々の意識化は、知覚状況を社会的共通記号に符号化することによる確認過程であり、客観化である。この過程を文の表出過程、つまり意図の発話過程について吟味すると、一層はっきりとする。発話に際し、我々は発話すべきことについての意図を持ってが、これは文として発話され表出されるまでは、単に抽象的意図に留まり、具体的内容を伴わない。それが文として発話される過程は、意図の分析・展開過程であり、その過程が逐次社会的共通記号体系である統語的記号に置き換えられて行くのであり、その符号化が完成したときに文が完結し、話者は自分の意図が客観化され確認されたことを知るのである。

5. 自我及び自己

本論では、自我をその個体の本来的な状態、自己をその自我が客観化されたものとして定義

する。ここで客観化は自我の状態を符号化し記号に置き換えることであるが、この符号化は筆者らの定義によれば、人が量的連続体としての外的世界を分節化し構造化するときの識別様式である。従って自我の状態を客観化したものとしての自己は、自我がこの符号化された様式としての世界へ投影されたものであるということになる。

このように考えると自我は無意識を、自己が意識をも併せて代表していることになる。つまり自我は人の主客未分化な状態として無意識的レベルに留まっているが、自己はこの自我が社会的文化的様式に投影され対象化されたものであり、様式として符号化されているので意識体験を伴うことになるのである。そしてこの自己の状態が更に客観化した場合には、自己を対象化した自己意識が生ずる。しかしこのことは自己及び自己意識は、自我が構成した外的世界へ投影されたもの、符号化されて記号に置き換えられたものに過ぎないということでもある。このように自己意識を外的世界へ投影され対象化されたものとして捉え、自己を個体内部に位置づける必要はなくなる。

この関係はやはり自我と自己を発話の意図とその言語化過程乃至は発話過程に置き換えて見ると分かりやすい。既に述べたように発話の意図は実在的な性質を持っているが具体性を持たない。これを具体化させようとする、言語として発話させねばならないが、この発話過程は、意図を分析して社会的文化的に容認された様式に従って、これを記号列に置き換えて行くことである。そのことによって意図は具体化され意識化されて確認される。しかし、それは意図が記号に置き換えられたということであって、実在性、つまり自我からそれだけ遠ざかることでもある。従ってその方向は自我の内部へではなく外的世界の方向への遠ざかりである。このことから、かつて考えられたような所謂「ホムンクルス」を仮定する必要は無くなり、ホムンクルスを仮定することによる無限後退の矛盾

も起こらない。

6. 自己実現

このように自我が外的世界を分節化・構造化してそこに世界が構成される。この世界へ自我を投影することによって自己が成立する。しかし外的世界は1個人によって総てが構成されるのではなく、過去の人類の営みの結果としての、社会的文化的様式の総体がここで言う世界である。個人はこの世界に働きかけ、変化させながら、この世界の一部に自我を投影する。こうして世界に働きかけ自我を投影し、自己の世界を構成することを、ここでは「自己実現」と呼ぶことにしよう。言い換えると自己実現は形のない自我を社会的文化的様式に投影し、その形を借りて自己を形成し、実現することである。言語の学習、生活様式の習得、職業の選択、仕事の遂行など総てこの自己実現の具体的事例である。ここで自我には自らを自己の形へ実現しようとする衝動のような力があると仮定しよう。もしこの衝動が阻止され、自己への実現がなされないような事態が生じた場合には、人格的障害が起こるのである。

7. 自我-自己-世界連続体

このように見てくると、自我、自己、世界の3者の関係は、実在としての自我を中心としてこれを取り巻く世界があり、その世界の内で刻々自己実現されて拡大し、時には特殊な事情によって縮小する自己領域があることになる。この関係をここで仮に「自我-自己-世界連続体」と名づけることにしたい。Landis, B. による類似概念「自我境界」があるが、彼らによる概念には自我と自己の用語使用に関わる混同が見られるので、本論ではこれとは別の新しい概念を提出することにした。

この仮定された連続体には、先ず自我領域があり（但しこれは領域といっても空間的の広がりを持たない点のようなものを想定している）、その周りに自我が世界に投影された自己領域があ

る。自己領域の外側に広がる世界は人類によって様式化された世界であるが、現時点ではまだその個体が自己領域に取り込んでいない、或いはそこまで自我を投影して自己を展開していない領域とする。自己領域を含んだ世界領域は、様式化された意味世界であり、物理的空間の類推としての意味空間として、仮に空間的に処理されるような性質のものである。当面、意味の広がりや意味の密度が測度として考えられる。このように連続体を分けると、この連続体上に「自我-自己境界」、「自己-世界境界」という2つの境界があることになるが、自己領域の中にもう一つ、「要請された自己-世界境界」を仮定する必要がある。この要請された境界は、この連続体を展開している個人が実際に実現している自己領域の外縁とは別に、更に、少なくともその個人が「自分から要請した境界」とその個人が所属する「共同体の成員から要請された境界」の2つに分けられる。そして実際に実現された境界よりも、この要請された境界が内側に位置づけられておれば、その個人は比較的安定しており両者の違いによる葛藤は起こりにくいが、外側に位置づけられておれば、その個人は活発な活動の必要性をもち不安定であり葛藤が生じやすいと考えられよう。またこれらの境界を挟んで隣接した領域の相互作用に関しては「透過性 permeability」の概念がある。この概念は、本論の連続体の境界にもこの概念は当てはめ得るので、そのまま取り入れることにしたい。この概念はこの自己境界の強度と関わりのあるもので、もしこの境界が極めて強固であれば、非透過性 impermeability であるといわれ、他者との共生 symbiosis が不可能となって孤立するが、透過性が高すぎると自己境界が事実上崩壊したのと同じことになり、自立できなくなくなり、更に環境がばらばらになり、自他の区別が十分出来なくなるといわれている。これが所謂自己境界の損傷の状態、病的状態になると、周囲の物が自分に向かって迫って来て自分の中に侵入してくる感じをもつといわれて

いる。普通の人では何かを注意するということは環境の中のどれか特別の対象が選択されることであるが、Schakow, D. (1962) が述べる精神分裂病者の場合には、注意対象が総て同じ強さで、同時に迫ってくるために耐え難い恐怖を引き起こすという。

この「自我-自己-世界連続体」において、自我は人としての本来的能力を備えた無意識的衝動的存在であり、これが世界を様式化し、また様式化された世界を取り入れ自我を世界に投影することによって、世界に開かれたものとなる。この過程が自己形成・自己実現過程であり、意識化の過程である。

8. 自己の選択性と多様性

先に定義したように、自己は、様式化され符号化された世界に自我を投影すること、つまり自我を対象化し客観化することによって成り立つものであった。この定義に従えば、自我はこの対象化する働きによって自己を作り出し、初めて世界に対して開かれたものとなる。ところでこの自我が自己を成立させる働きは、様式化された世界の総てに対してではない。時と場所により世界の様々な部分との交渉によって、自己を成立させている。従って個人の1つの自我は様々な世界の部分に選択的に働きかけ得ることで複数の自己が成立し得る。

このように考えてみると、これまで我々は一般的に「自己」と言うものを、生得的に備わった唯一絶対的なものであると考える傾向があったが、自己は生得的なものではなく、後天的に作り出されたもの、唯一絶対的なものでもなく、複数にあり、相対的なものであると考えねばならなくなる。

そうすると、その人の自己は、自我が世界と交渉し、世界を取り込み、且つ世界に自我を投影することによって、作り出されたものであり、世界との関わりによって如何様にも構成可能なものであるということになる。これまで、それが自分自身であり、唯一絶対のもので

あり、つまり何時でも、いま自分が意識している自己のみしかないと、我々は考える傾向があるけれども、実はそう錯覚しているだけであって、実際には世界との関わりに応じて幾つもの自己が形成され、その自己が、時間の経過に沿って刻々交替し、或いは幾つもの自己が同時に並列して拮抗している可能性がある。つまりどの自己のときにも、その自己の主体は同じ一つの自我であるから、何時も「自分だ」と感じ続け、異なった自己を体験しているのだという気がしないのである、ともいえよう。

この問題も、やはり人の符号化様式の典型例であり、意識の形成に関わりのある言語活動の例を用いて説明することができる。等位型の Bilingual 形成過程は、1個人に2つの自己が形成されることの具体例となり得るものである。すでに述べたように、言語はその言語文化圏の生活文化様式が記号列として継時的に展開されたものである。そして発話過程はその人が持っている意図、これは発話されるまではその人にとっては自明なことではあるけれども、その段階では文化的様式化が実現していないので、無意識のレベルにあり、自我-自己の関係に置き換えると「自我」のレベルにある。これが発話されるということは、文化様式として定式化された統語様式に意図を載せて展開することであり、その過程で意識化が成される。従ってこれを「自我-自己」関係に置き換えると「自己」に相当するものであると考えて良いことになる。ところで1つの言語システムを習得するということは、その言語文化様式を取得することであり、その言語を習得した人はその言語で感じ、考え、自己意識する。つまりその言語圏における様々な状況によってそこに1つの自己群が形成される。このように考えると、基本的自己の形成は言語の習得と深く関わっており、言語学習の臨界期と言われる時期ごろまでになされるものと言えよう。

ところで等位型の Bilingual とは A, B 2 系統の言語システム乃至は言語様式があった場合

に、1人の人が、一方のA言語システムを習得するときに、もう1つのB言語システムとは全く独立にこれを習得する。同じ「リンゴ」を前にして、それを「りんご」と日本語で習得し、用いる場合には、それは日本文化における文脈において理解され、「apple」と英語で習得し、用いる場合には、英語文化における文脈において理解される。そして記憶貯蔵庫に関しても全く別に処理される、と考えられている。この場合、言語化される前のレベルの発話の意図は1つであるが、これが日本語で発話される時と英語で発話される時とでは、それぞれの文化様式に載せられ、つまり投影されることになり、2つの異なった文化様式に載せられて表出・展開されることになる。これは丁度、自我は1つであるが、これが2つの様式へ投影され、意識化されて自己を形成して行ったということと同じである。従って等位型のBilingualistは、2つの言語を使い分け、自我を2つの文化様式にそれぞれ独立に投影し、2つの自己を使い分けられていることになる。しかしそのどちらの言語の使用時においても、つまりどちらの自己に依拠しているときも、やはり自分は同一の人間であり同じ自己意識を持ち続けている主体であると、感じているものと思われる。ここで2つの自己が交代するにも拘わらず、どちらの自己においても同一の自己意識が継続していると感じられるのは、この2つの自己が同一の自我の投影であることによる。例えば実際には英語を話しているときの自己と日本語を話しているときの自己とは別である、と考えなくてはならない。つまりここでは同じ自我が、「自己E」と「自己J」とに分かれていることになる。これは奇妙に思えるかも知れないが、先に行った「自我」と「自己」の定義からの当然の帰結である。

等位型のBilingualでは、2つの言語の力関係は等しいわけであるから、一種の2重人格がここに形成されていることになる。多くの言語を習得することによって、国際人が育つ、とい

うように評価される傾向があるが、このように見てくると、完全な等位型の言語習得においては多文化的融合は、不可能なことであり、且、決して好ましいことではないともいえよう。恐らくこの種の国際人の言動は、国籍不明で、首尾一貫しないことになるはずである。

もっとも通常この2つは、上手く使い分けられるので、必要に応じて交替することになるが、特定の意図を英語で話したり、日本語で話したりする、その切り替えが極自然であること、自己が本来何であるのかを殆ど意識しないためにこれが2つの自己の交替であるとは、本人はもとより、観察者にも気づかれないのだと考えられる。

多重人格は、普通、精神異常のケースとして取り扱われており、完全な別人格が交替し、一方の自己が他方の自己について、全く知らないというケースが本当にあると考えられている。このような異状な多重人格はともかくとして、前述のmulti-selfとしての軽い多重人格という概念を許容すると、我々は、社会的場面、状況の変化、接触する文化、生活様式、対人関係などにおいて、それぞれ別の自己を形成していることになる。それは適当に或いは適切に使い分けられており、それらの自己を、「唯一の主體的自己の存在」と言う、先入観、或いは思い込み、によって連続したものと錯覚しているのだといえる。

このmulti-selfの概念に基づくと、以下に示すような幾つかの心理現象がうまく説明できる。我々が白日夢に耽って、ついしなればならなかった本来の仕事や、勉強を放り出している自分に、ふと気づいた場合など、このときの状態の一般的な表現は「我に返ると」と言うものであり、引き続いて、「私は、初めにやりかけていた仕事をすっかり放り出している自分に気づいた」というのであるが、そこにはっきりとした意識の断絶があり、断絶した自己の交代がある。或いは、必要が出来て別の部屋へものを探しに行った場合を考えて見よう。隣室へ

移動すると何を探しに行ったのか、すっかり忘れて思い出せなくなることがある。このような場合、普通「ど忘れした」というが、果たして本当に、「ど忘れ」したのだろうか。移動する前にいた部屋の中において捜し物が必要だと思ったときの自己と、隣室へ異動してきた時の自己はその環境が異なることによって別の自己になっている可能性がある。「従ってさっき考えていた」ことは「今の自己は知らない」。しかし、どちらの自己も唯一の自我の投影であるために、同じ自己であるという意識を持つ。この唯一性と言う思い込みによって、別の自己になっていることに気づかないために「ど忘れした」と思い込むのだと説明することも可能である。我々は通常このようなときには、元の部屋のさっきの位置に戻って、例えば椅子に腰掛けて心を澄ますと、「あれを探しに行こうとしていたのだ」とふっと記憶が蘇って来るのである。普通これを「忘れていたことを思い出した」と説明する。しかしこれは複数の自己を容認すれば、元の自己に戻ったので、何を探そうとしていたかが理解されるのだと説明することが出来る。大抵の「ど忘れ」は、覚えたときの状況とか、考えたときの動機とかのような手がかりがあると、「思い出される」のである。それを「その手がかりによって思い出した」と解釈するのと、或いは「それを体験した自己に戻ったからであって、決して忘れたことを思い出したのではない」と解釈するのと、どちらが合理的であろうか。「忘れたことを思い出す」と解釈すれば、脳の中から失われたものが回復することではなくてはならなくなる。しかし「忘れて、失われたもの」は、そのままでは決して回復するはずはなく、もう一度学習し記憶し直さねばならないはずである。「思い出す」ということは、保存させていたものが意識の表層へ、つまり符号化されることによって自己へと回復することなのであるから、元の自己に戻ることによって「思い出される」と解釈する方が合理的であろう。思い出すための手がかりは、学習し或いは

経験し記憶したときの自己へ復帰するための手段であると考えべきである。

このように考えてくると、次のように説明することができる。本来、自己は唯一のものではなく多様な自己があり、これが普通極自然に継時的に交替している。そしてときには、拮抗し、葛藤を引き起こす。この継時的交替は、もっと詳しく吟味し、説明する必要があると思われるが、ここでは、動画の情景は、実は断続的な静止画のコマの連続であるが、我々はそのことに気づかない、これと同様に多様な自己の継起に気づかないのである。そしてこの多様な自己がいずれも1つの自我に根差しているの、そのいずれの自己においても我々は同一の主体感を持つのであると説明し得る。一方複数の自己の同時的拮抗が生ずる場合には、悲喜こもごも、泣き笑い、等の言葉で表現されている複合的乃至葛藤状況が生ずる。

何か特定の決定をしなければならぬときに、幾つもの選択肢があって、そのどれにすれば良いか迷う場合がある。そのようなときには、従来1つの自己が、幾つもの選択肢を並べて、そのどれにするか悩んでいるというように考えてきた。しかしこの場合、multi-selfの概念に基づけば、それぞれの状況を代表する自己が競合・拮抗しているのだと考えることが出来る。不幸な人を前にして、自分の財産を少し分けてやろうか、見捨てて立ち去ろうかと迷う場合には、少なくとも、価値観の異なる、つまり世界認識の様式の異なる2つの自己が、それぞれの自己を主張しているのといえよう。また自分の将来の職業を選ぶときの迷いを例にとると、選ばれるべき職業は、現代社会において成立している人の生き方のパターンであり、それはそれぞれの文化様式のパターンであると考えらる。ここで定義されていた自己の概念は、自我が文化様式に載せられることによって実現するもの、または実現したもののことであった。従って将来の職業の選択は、その様式に載せるべき「将来の自己」を選択することだと

いうことになる。このような場合は、これからのような自己を選択しようかという迷いなのである。幾つものなりたい自己があって、その想定された自己が競合して迷いが生ずるのだと解釈される。

9. ヴァーチャルリアリティとしての自己

自己がこのように自我が社会的文化的様式に符号化され、投影された表象であり、複数の自己が交代しながら、しかも主観的には1つの自己の継続として体験される傾向があるのだとすると、それぞれの自己は、言わば、ヴァーチャルリアリティとしての性質しか持ち得ないことになる。我々は現在体験している自己、つまり自己意識（及びその内容）を現実のものと思っているけれども、それは我々が「構成した世界」を自我が体験しているに過ぎないことになるからである。それでも我々は、映画やテレビ、ビデオ、パソコンゲームなどで映写される画面の内、明らかに架空のものとして作り出された映像と実際に我々の世界で生じているとされる場面の映像とを区別して、前者として知覚した表象を架空の映像、後者として知覚した表象を現実の映像と見做して来た。更にこのような映像ではなく、直接世界を体験しているときに我々が知覚し体験する表象を真の現実と見做して来た。しかし十分に吟味すると、この3者の間には、社会的文化的様式の符号化としての表象という意味で本質的相違はないことが分かる。これまでこの3者を我々に区別させていたものは、それが所謂「現実」に関して、「これ」に似せて人工的にこしらえられた映像であるか、「これ」の映像を作られたという文脈の中に組み込んでいるか、「これ」と直接対決しているか、といった違いを、各自が「認識して区別していた」だけである。しかし最近の映像技術は格段に進歩して「ヴァーチャルリアリティ」の概念を生み出した。つまりそこでは人工的に作られた映像の表象は、従来我々が所謂「現実」と直接対決していたときに体験した知覚表

象との区別を困難にしている。所謂「ヴァーチャルリアリティ」は限りなく所謂「現実」に近づいてきた。このことはから、ヴァーチャルリアリティ体験が「自己」を作り出す可能性を考えねばならない。

例えば、映画を見て大きな感銘を受けることによりそこに表現されていた映像としての「世界」が自己領域に取り込まれる。パソコンゲームやテレビゲームの場合には、それは単に映像としての「世界」が受動的に自己領域に取り込まれるのではなくて、映像に能動的に働きかけこれを操作することによって一層緊密に自己領域に取り込むことになる。しかもこの映像は、益々所謂「現実」と区別がつかなくなりつつある。「それは架空の、虚構の映像である」という認識は薄れていき、従って「現実の自己」としての認識が益々強固なものとなっていくことになる。

これまで現実と虚構との違いを区別していたものは、単にそれを体験する人が、「それ」を自分がそれと直接対決しているのか否か、ということの認識の相違に過ぎない。このことは次のようなケースを考えてみるだけで十分であろう。巧妙にして、完璧に贋造された名画を前にして、これを鑑賞している人にとっては、それが真作品であるか贋造品であるかの区別は、その人がそれが真作品であるか贋造品であるかに関する知識乃至認識であるに過ぎない。このことはむしろ我々が現実と思っていたものが総て現実である保証はどこにもなく、ヴァーチャルリアリティに過ぎないかもしれないのである。我々が自己意識する現実とは外的世界を解釈し、それを社会的文化的様式として符号化することなのであった。ヴァーチャルリアリティと真のリアリティとは、それが共に社会的文化的様式として符号化され記号に置き換えられることによって初めて我々に認識されるものであり、これまで両者を区別するものは、一方が他方に比べて「非現実的」とであるという認識に過ぎない。従ってこの「非現実性」が取り除かれ

た場合には、両者の区別は不可能となり、実際問題として両者は同じものとなる。かつて「現実」、例えば残酷行為や殺人行為が、映画やパソコンゲームに取り込まれたように、今度は、リアルな映画やパソコンゲーム上での残酷行為や殺人行為が、そのまま「所謂現実の自己領域」へ移行し、実行されることになる。

この認識に立つと、今後ヴァーチャルリアリティが益々日常化していく世界において、それが自己領域に取り込まれ、多様で新奇・奇怪な自己が形成されていくであろうこと、我々は多様な自己をどのように統制していくべきかについて、十分な対策を立てる必要がある。何故なら現在ヴァーチャルリアリティは益々「現実」と見分けがつかなくなっており、自己形成に重大な影響を与え始めているからである

10. 複数の個人の自己の相互関係

—催眠現象を例にとった説明—

前項で、1個人の中での複数の自己、自己の多様性ということについて触れたが、複数の自己の競合・拮抗は1個人の中で起こる場合よりも、多数の個人の中で起こる場合の方が、一層一般的である。この問題をここでは催眠現象を題材にとって考えてみることにする。

自己統制というとき最も分かりやすいのは、所謂「自己催眠」だと思われるが、これは他者催眠とは異なって、自分で自分を統制するものと、一般に説明されている。この場合は統制する自己と統制される自己とが揃っていることになる。しかし自己催眠では、統制する自己と統制される自己とは、明確に定義されていない。そこでここではっきりとした定義が必要となる。筆者らの定義では、統制する自己は、本論で「自己」と定義したものであり、統制される自己は、これも本論で先に定義した「自我」であると考えられる。そこで、自己催眠で実際に行っていることは、この自我が世界に対して投影されることによって作り出された自己に、つまり自我を対象化した自己、仮想のものに過ぎ

ない自己にがっかりと組み込まれてしまっている呪縛を解く操作なのだといえる。自己催眠の主要タームが、passive concentration であるということがその一つの回答にもなると思われる。

ところで自己催眠も他者催眠も最終的には言語暗示によって統制が行われる。本論で議論してきたように、言語が意識の一樣態であると考えると、この関係が理解しやすくなる。

他者催眠では、この被術者の自己の役割を術者と被術者が分担して行うもので、術者が被術者の自己を麻痺させて、代わりに術者の自己を被術者に提供しようとするものだと考えることが出来る。つまり本論の用語法では、術者の「自己」が被術者の「自我」を統制すると表現されることになり。普通、個人の「自我」と「自己」との関係は、

自己

↑↓

自我

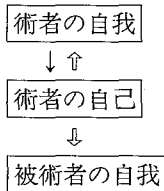
の関係が成り立ち、自我が意図することを世界へ投影することにより自己を形成し、意識化するのであった。そして自己は仮想のものに過ぎないが、それにも拘わらず、その自己による自我の統制ということが生ずる。それは言わば自我が自己に置き換えられるためであるとも考えられる。このような場合、例えば、「自分は意志が弱い、何とかしなくてはならない」という意味のことを(自我で)「感じて」いたとすると、それを「私は今日から決めたことはしっかり実行しよう」「もう、パチンコにうつつを抜かしたりすまい」と言語的に表象し(意識化し)自己確認する。それは、「私は今日から意志の堅い人間になる(またはそういう人間です)」という自己像を作り上げることによって、自我を囲い込むことになる。言い換えると、自我はその枠内でしか自己表現出来なくなることによって自己に統制されることになるのだといえよう。つまり自我が自己を実現しようとする、その自己の枠組みに沿って実現されることにな

るからである。このとき自己は様式化されたものであり、この様式化は人の場合、言語様式が最も一般的で強力なものといえるので、先の例のように言語によって枠付けされる形で行われるものと考えられる。実際、催眠は自己催眠でも他者催眠でも、みな言語暗示によって誘導され統制されている。従って普通の日常生活でも、自己による自我の統制がこのような自己つまり言語を媒体とした自己像のによって行われていることになるが、これが十分に機能しないとか、歪んだ自己像が形成されていて、あるべき自己像が表象できないような場合に、特殊な自己催眠の訓練が必要となるのだと考えて良いのではないかと思われる。

他者催眠の場合には、この関係が2人の個人の間で行われることになる。つまり、次の図式が成り立つ。



初めに術者によって、被術者の自己の機能を弱め、或いは剥奪しておいて、次に被術者の自己に成り代わって被術者の自我に枠をはめる。結果として次のような図式のものに置き換える。



本来、1個人は「自我・自己」という閉じた関係を持つと考えられるが、上の関係は2人の個人が開いた関係になり、2つの自我が1つの自己を共有したものになっており、しかも術者の自我・自己による被術者の自我への一方的支配の関係になっている。筆者らの分類では、これは開放型であり、被術者による、術者への自己の「委譲型（明け渡し）」乃至は術者による被術者の自己の「収奪型」であることが分かる。こ

の場合、自己は同一人の中で競合するばかりでなく、他者との間で入れ替わり、競合することもあり得る。勿論このとき、他者への自己の委譲や他者から収奪されることには抵抗があり、必ずしもスムーズにこれが行われるわけではない。人にもよるが、抵抗があり、これを緩める手段として開発されたのが、催眠導入の様々な技法であるといえる。

他者催眠では、Landisのいう透過性が非術者側へ一方向性に強まっているということになる。このようなケースでは、術者は被術者の痛みを理解出来ないが、被術者は術者の痛みを理解できる状況にあるといえる。しかし恐らく被術者は受動的に感じているだけであって、リアルな体験ではないはずである。そこで両者が相互に相手の痛みを共有出来るような状況を説明できるモデルが必要となる。

11. 複数の自己の共通領域

意識体験は総て個人に属するもので、原則として他の個人の体験を共有することは出来ないはずであるが、それにも拘わらず、多くの場合に我々は他者の体験を共有できる、或いは他者と共通の体験をすることが出来る、と考えている。そこでここでは、これがどのようなメカニズムによるのかについて、考えてみることにしたい。

これは前に、述べたことであるが、意識はその有機体の生存を脅かすような状態が生じたときに、その状態の危機・警告の識別様式として生じてきたものであると考えた。「生存」ということは、ここでは有機体が存続するということであるから、これも先に述べた「存在するものがあり続けようとする」ということ、もう少し心理学的表現を取ると「意志」のことである。これは何かの妨害が加えられない限り、スムーズに機能するもの、従って何かによって動かされるのではなく、直接的・自律的・自動的性質を持っている。このような機能の性質は意識に対立する無意識と見做すことが出来る。この無意識状

態に何か妨害が加わりると、この妨害要因やそれによって引き起こされた変化の識別様式としての意識化乃至は意識内容としての体験が生じず。このように意識を捉えたと、こうして生じた意識体験は、意志の客観化であり、存続を脅かしている現実を起こっていることがどのようなものであるかを、はっきりと記号に置き換える作業であるといえる。このような様式化、記号化のフィルターを通して、意志が無意識の状態から意識化されるのだと考えることが出来る。普通、意識は心理現象であり、物質的現象に対して主観的なものと考えられがちであるが、このように位置づけると、むしろ客観的なものであるということになる。感情なども、主観的なものの最右翼にあると考えられがちであるが、感情は、同じ意味で意識の1つの様態であって、事態の客観化として生じてくるものである。その意味で、事態を様式化し記号化していくのであるから、意識が一層進化するということは、これが多層の記号化によって間接化されていく過程である。従って無意識が意志の直接的性質であるのに対して、意識は意志の間接化の方向だという側面もある。

従って、意識の起源から考えると、危機が存在しなければ意識は生じないはずであるが、現在の我々の日常では、この極度に進化した意識のレベルでは直接的危機が存在しなくても、意識が生じ、維持される。つまり識別様式の多様化・重層化の進んだ段階で、意識の本来の機能が希薄になり、直接的危機・警告の識別機能が弱められて間接化されているのだとよい。この図式を、先に述べた「自我－自己－世界連続体」上に載せて説明すると、「自我」は意志的側面を持った人の本来的性質であり、自らを世界に向けて開こうとする衝動を持っている。「自己」は「自我を様式化された世界へ投影したもの」、或いは「そこへ自我を対象化したもの」、つまり「自我が世界に対して開かれた状態が客観化されたもの」といえる。その様式化が一層単純で直接的なものほど、その個人にと

って生存に直結したものであり、その様式化・システム化が一層間接化している場合には、多様化・多元化し、その構成要素はそれだけ特殊化していると考えてよい。もう少し別の表現を使うと、自己空間乃至自己の意味空間が1次元的なものから多次元的なものへと展開しているということになる。

そうすると、次のように考えられないだろうか。つまり様式化・システム化が進んでいない一層基本的生存レベルに近いほど、異なった個人がそのレベルで共通の様式化によって意識化を達成する可能性が大きくなる。一方様式化・システム化が進むに連れて、他の個人と共通した様式化による意識化の可能性は小さくなる。言い換えると「自我－自己－世界連続体」という「意味空間」における特定の空間領域が異なった個人で重複したり接近したりする可能性として理解することが出来る。つまり共通の意識体験乃至疑似共通意識体験をする領域は前者が大き、従ってその可能性もまた大きくなるが、後者では逆にその領域は特殊化してその領域は狭まり、その可能性も小さくなる。そればかりでなく、仮に共通して体験される場合でも、前者ではその体験内容はより基本的生命的レベルのもので、他の個人の体験との区別がつけがたいが、後者においてはその体験内容は特殊化しており、他の個人の体験と同一体験となる可能性はそれだけ小さくなる。

このことは、具体的にはその人の生活空間である社会が高度にシステム化されて十分に機能しているときには、その構成員である個人が相互に共通体験する意味空間はそれだけ少なくなると言うことを意味している。それぞれの個人が独自の極めて特異な意味空間を占有しており、他者を理解することも、他者の理解を得ることも極めて難しくなる。もっともたまたま一致することがあれば、非常に緊密な一致となり著しい一体感・共感を体験することは出来るものと思われるが、その可能性乃至確率は極めて小さい。そしてもしこのような特殊化の極にあ

るような意味空間の共有によって生ずる共通体験は、様式化と記号化の積み上げによる間接化が進んでいるので、知的記号的な、或いは極めて抽象的な特殊な共通体験でしかなくなる可能性が高いと考えらる。つまり同じ体験をしているという認識はあるが、それは極めて抽象的なものであって、所謂「共感」には程遠いものとならざるを得ない。

これに対して、もしこのような高度にシステム化した意味空間が崩壊に瀕したときには、つまりそれぞれの個人の意味空間も崩壊するので、そのような場合には、基本的・生命的レベルでの意味空間のみが残存することになる。このような場合には、どの個人も基本的・生命的レベルの意味空間しか保持できないため、必然的に共通の体験を持ち、異なった個人が相互に他の個人の体験を共有したのと同じ効果を生ずることになるはずで、更にそれは生命的レベルに極めて近いので、その共通体験は強い「共感」として体験されることになるだろう。敗戦、自然災害による社会・政治・経済システムの崩壊のような場合には、これが具体化する。

ところで、先に挙げたように、様式化・記号化の一層進んだ間接化の終端での意識体験は、意識体験は抽象化されたものとなっており、他者との共感が極めて希薄になるが、このことは、その個人の意識体験の内容、つまり体験される対象に対する共感もまた希薄化することになる。そこでは、単なる記号操作が行われているだけであり、その記号が代償しているものやことに対する共通体験は殆どない。つまり他者や対象物に対する痛みは体験されなくなっている可能性がある。

文 献

Audi, R. Self-deception, rationalization, and reasons for action. In eds. B. P. McLaughlin and A. O. Rorty *Perspectives on self-deception*, London: University of California press, 92-120, 1988.

Francis, S. E. Chaotic phenomena in psychological self-regulation. In eds. B. Robertson and A. Combs *Chaos theory in psychology and the life sciences*, New York: Lawrence Erlbaum Association Publishers, 253-265, 1995.

池田妙子 予期不安・未来予知に関する生理心理学的研究—HRを指標とした予期不安の学習過程について—。金沢大学教育学部教育心理学昭和62年度卒業論文, 1988.

Johnson, M. Self-deception and the nature of mind. In eds. B. P. McLaughlin and A. O. Rorty *Perspectives on self-deception*, London: University of California press, 63-91, 1988.

金西美由紀 情操と自己実現の心理学—文化様式としての映像が情操に及ぼす効果について—。金沢大学教育学部教育心理学平成7年度卒業論文, 1996.

Landis, H. 馬場礼子 小泉れい子訳 自我境界。東京: 岩崎学術出版社, 1981.

McLaughlin, B. P. Exploring the possibility of self-deception. In eds. B. P. McLaughlin and A. O. Rorty *Perspectives on self-deception*, London: University of California press, 29-62, 1988.

Nadler, A. and Fisher, J. D. Volitional personal changes in interpersonal perspective. In eds. Y. Klar, J. D. Fisher, J. M. Chinsky and A. Nadler *Self change: social psychological and clinical perspectives*, New York: Springer-Verlag, 213-230, 1992.

Orne, M.T. and Bauer-Manley, N. K. Disorders of self: Myths, metaphors, and the demand characteristics of treatment. In eds., J. Streuss and G. R. Goethals, *The self: interdisciplinary approaches*, New York: Springer-Verlag, 199

- 1, 93-106.
- Pollio, H. R. The stream of consciousness since James. In M. G. Johnson and T. B. Henley *Reflections on the principles of psychology*, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers, 271-294, 1990.
- Rorty, A. O. The deceptive self: Liars, Layers, and Lairs. In eds. B. P. McLaughlin and A. O. Rorty *Perspectives on self-deception*, London: University of California press, 11-28, 1988.
- Shakow, D. Segmental Set. A theory of the formal psychological deficit in schizophrenia. *Articles of general Psychiatry*, 6, 1-17, 1962.
- Wieland, R. Temporal patterns of anxiety: Towards a process analysis of anxiety and performance. In ed., R. S. Scharzer *The self in anxiety, stress and depression*, North Holland: Elsevier Science Publishers B.V. 133-150, 1984.
- 山岡哲雄, 川平美根子, 尾坂由紀 言語学習における「臨界期の問題」—第二言語の学習に関する心理言語学的考察—。金沢大学教育学部紀要(教育科学編) 44, 277-288, 1995.
- 山岡哲雄, 尾坂由紀, 紀川平美根 瞑想と意識の流れに関する心理学的研究。金沢大学教育学部紀要(教育科学編) 44, 289-302, 1995.
- 山岡哲雄, 川平美根子 発話の意図の見解に関する研究(I)。金沢大学教育学部教科教育研究, 31, 85-92, 1995.
- 山岡哲雄, 尾坂由紀 意識のゆらぎに関する心理学的研究。金沢大学教育学部紀要(教育科学編), 45, 159-168, 1996.
- 山岡哲雄 自己統制の心理。平成8年度大学院講義録「学習心理学特論I-A」, 1996.